

# 「茅葺(かやぶ)きの風情を現代に生かす」

2013年9月26日  
NHKラジオ

2012年11月18日  
朝日新聞

**Breakthrough**  
突破する力

熊谷秋雄

茅葺き職人

ふるさとを飛び出し、家業の魅力を知った。大震災を乗り越え、新たな茅葺き建築を日本の風景にする。

文庫編集者(以上の経歴記事)  
写真:菅原誠(以上の経歴記事)  
文:熊谷秋雄



茅葺(かやぶ)き職人...熊谷秋雄

1964年、宮城県石巻市生まれ。酪農学園大学(北海道江別市)を卒業後、アジアやアフリカの農村指導者を養成する学校法人アジア学院(栃木県那須塩原市)で1年間、ボランティアに従事。88~91年、青年海外協力隊員としてフィリピンに派遣された。帰国すると茅葺きの家業に就き、93年、父と兄とともに有限会社「熊谷産業」を設立。2008年から社長を務める。大震災の後、北上の自然を生かした地域づくりに取り組もうとNPOを立ち上げた。

2012年11月18日 朝日新聞より

10月上旬、ドイツであった茅葺(かやぶ)き建築の国際会議に、一人の日本人がいた。熊谷産業(宮城県石巻市)の熊谷秋雄(48)だ。「津波の被害は?」。欧州の職人仲間から声をかけられると、熊谷は答えた。「何とか立ち直ってきた。これから新しい茅葺き建築を広げていくよ」

会社がある石巻市北上町は、日本有数のヨシの産地だ。北上川の河口付近10キロほどにわたってヨシが群生している。ヨシは葦(アシ)とも呼ばれ、茅葺き屋根に欠かせない。

東日本大震災の際、北上町も津波にのまれて260人を超える死者・行方不明者が出た。熊谷産業の従業員は無事だったが、社屋や社員寮、茅刈り機など資産の大半を失った。熊谷は従業員の家を回って当座の生活資金を手渡し、「必ず会社を立て直すから力を貸してほしい」と頭を下げた。

それから半年、最初にヨシの倉庫を再建した。外壁全体を茅で葺いた。国内にはほとんど前例がなく、本場オランダから職人を呼んで指導を仰いだ。

「どうせ一から出直すのなら、前からやりたかったことをしたくてね」

## 廃業の瀬戸際で

祖父の代から茅葺き業を営む家の三男に生まれ、10歳ごろから仕事を手伝っていた。刈り入れられたヨシは加工場で切りそろえて束にされ、丈夫な縄で屋根に固定される。ヨシを束ねると手に無数の切り傷ができ、重い束を運ぶと腰や背中がパンパンになる。「つらい仕事でね。継ぐ気はまったくなかった」

高校を出ると、故郷を飛び出した。

北海道の大学で酪農を学んだ後、青年海外協力隊員として畜産を指導するためフィリピンに渡る。そこで、思いもよらない風景に出あった。山あいの集落に、北上町と同じような茅葺きの家々が建っていたのだ。故郷から数千キロ。見慣れたはずの茅葺きが不思議と新鮮だった。「うちも、これをつくっているんだ」と、家業への誇らしさが膨らんできた。「日本でも、この風景を残したい」

ところが、3年たって帰国すると、父や兄は家業の廃業を考えていた。屋根の葺き替え需要は途絶え、ヨシを下地に使う土壁の家も激減。人の手が入らなくなったヨシ原は荒れていた。「続けよう」と熊谷が訴えても、誰も賛成してくれない。

1998、99年及び2005年の3回にわたり社団法人全国社寺等屋根工事技術保存会が主催した欧州茅葺き保存体制視察研修に参加し、イギリス・ドイツ・オランダ・デンマーク・ハンガリーを廻る。「オランダで見た茅葺きの別荘で人生観が変わりました。300棟くらい並んでいて、しかも新築だった。これから茅葺きがトレンドになると自信を深めましたね。」“自然の素材を生かした茅葺きは、ヨーロッパではステータスにもなっていて、環境や周りの景観をも意識して造られています。”その後スペイン、南アフリカ、フィリピン、中国などに出向き茅葺き事情を勉強する。

我が国では茅葺き屋根の施工には消防法や建築基準法の規制がかかり、特に新築は厳しく制限されている。北上町も葦原で有名になり、いわば観光名所なのに新築の茅葺きは建てられなかった。その矛盾に気づき役所と交渉して規制を緩和してもらった。ほかの地域でも「茅葺き特区」構想とかいろいろな動きがある。大分県の湯布院温泉や熊本県の黒川温泉では茅葺きの新築が建ち始めている。茅葺の家は世にみられ、特に欧州では茅葺職人は組織化され一つの産業を構成している。オランダでは「茅葺の消防署」、ドイツでは「茅葺のガソリンスタンド」、ウイーンの郊外には「茅葺の家が沢山ある」。ハンガリーのドナウ川近くには広大な葦原がある。南ア、フィリピンなどでも茅葺の家がある。

日本における茅葺の家の課題として、火にあぶない、職人がいない、コストが高い……などがあげられる。自然環境を守り、循環型の社会を建設する意味でも日本で茅葺の家を広めたい。 2013年9月26日 NHKラジオ

「現場を知らないと説得できない」。そう考えた熊谷は、地元で一番腕のいい70代の老職人に弟子入りした。こうと決めると、すぐ動かないといられない性分だ。

「外国で遊んできた三男坊が、また親のすねをかじって」。陰口も聞こえたが、食いぶちは自分で稼いでいた。実家が漁業権を持っていたので、関東の料亭に飛び込み営業をかけ、北上川でとったウナギやシジミを売って回った。ひと夏で70万円ほど稼いだこともある。

「家業を続けることは、地元のヨシ原を守ることにもなる」。熊谷の熱意に父・貞好(78)も折れ、廃業を思いとどまることにした。貞好は言う。「秋雄は、こうと決めたら聞かぬえっす。おれと似てるんだな」

会社を立ち上げて新たなスタートを切ったころ、同業者は相次いで廃業していた。仕事ぶりが口コミで広がり、中尊寺や兼六園、伊勢神宮など全国各地の名所旧跡も手がけるようになる。いまでこそマネジメントに徹する熊谷も、最初の3年は屋根に上って茅を葺いた。経営は安定したが、熊谷の中で「何か物足りない」との思いが膨らんでいく。